

クローズアップ・コレクション

### 柳原義達 《風の中の鴉》

1982(昭和57)年  
ブロンズ 59.0×47.0×101.0cm  
作者寄贈

原 舞子



「カラスは彫刻の制作意欲を激しく駆り立てる存在なのである」<sup>1)</sup>と語り、生涯にあまたの鴉の像を制作した柳原義達(1910-2004)。柳原と鴉との「付き合い」は1965(昭和40)年、神戸市の動物愛護協会から動物愛護にちなんだ記念碑の制作を依頼されたことから始まりました。柳原は記念碑制作の取材として神戸の動物園に通い、さらには大自然の中の鴉の姿を追い求めて北海道の網走や青森の北半島などへもスケッチ旅行をし、その姿態を繰り返し描いたといえます。依頼を受けた翌年、神戸市東遊園地に鴉と仔馬を組み合わせた《愛「仔馬の像」》が設置されました。また、同年の第7回現代日本美術展に柳原は《風と鴉》を出品しています。

こののち自宅でも鴉を飼育するようになり、柳原は鴉を題材とした作品を立て続けに制作しました。柳原が生涯を通じて取り組むことになる「道標」シリーズの端緒となったのも鴉の像でした。実際の鴉の姿よりもかなり大きくかたちづくられる場合もあり、マッサ(量塊)を感じさせる力強い表現が魅力です。

本作の鴉は、二本の足で地面あるいは石のような塊をつかみ、頭を低く下げています。飛び立つ直前なのか、飛び降りた直後なのか、動きと動きの合間に一瞬だけおとずれの静止した状態を切り取るかのように表現されています。鴉は一羽だけでこの世に存在しているのではありません。風の中とタイトルで示されているように、風や嵐に耐え、自然との関係の中にたえずんでいるさまが表されているのです。

残された作品群を目にするたび、柳原ほど挑戦と失敗、成功を繰り返しながら造型の探究を続けた作家は他にいなかったのではないかとさえ感じます。制作という孤独な作業を貫き、彫刻家として歩み続けた柳原の姿は、吹きつける風の中に立つこの鴉の姿とどこか重なって見えます。

註1) 柳原義達「カラス」(『風独なる彫刻—造形への道標』アルテヴァン、2020年、p.118掲載、文章の初出は1982年)

### 休館のおしらせ

道田美貴



三重県立美術館外観 写真撮影：松原 豊

10月12日(土)から12月1日(日)まで開催の「知っておきたい 三重県の江戸絵画」と「没後20年 柳原義達展」、「小特集：浅野弥衛」を含む「美術館のコレクションⅢ」が幕を下ろした後、施設改修工事のため3月下旬まで休館します。

あらゆる利用者にとって安全で快適な施設であること。美術作品を適切な環境で展示活用して保存し、次代に繋いでいくこと。いずれも公立の美術館にとっては不可欠ですが、築42年の当館は老朽化が著しく、施設設備の改修や更新なしにはその責務が果たせなくなっています。開館40年を迎えた2022年度にも約100日間休館し、防排煙設備及び自動火災報知設備、展示室・収蔵庫内のガス消火設備など防災関係の改修工事とエレベーターの更新をおこないました。

今年度は、受変電設備、トイレなどの改修工事を予定しています。工事期間中は、作品の保全に細心の注意を払いながら、美術館の情報発信や館外での活動に取り組み、再開館に向けての準備も進めます。今年度の開館は、12月1日までとなりますので、どうぞお見逃しなく。

### 表紙解説

#### 「知っておきたい 三重県の江戸絵画」展より

村上 敬

スギナやムサシアブミといった草花の上を、オニヤンマやギンヤンマなどの蜻蛉が飛んでいます。左幅のギンヤンマを詳しく見ると、蛾を捕食しながら飛んでいることに気づきます。蛾を抱えて複雑になった脚の構造も正確に描いています。微細な描写ですが、作品をよく観察することで、昆虫や草花の生き生きとした様を描き出そうとする作者の意図がくみ取れるのです。

作者の増山雪齋(1754-1819)は、長島藩(現在の桑名市長島町)の藩主で、絵を描くことに長けた文人大名として知られています。雪齋は藩主を引退した後、原因は不明ながら、幕府より謹慎を命じられました。知人、友人との交流が断られた雪齋は、昆虫を友とし、その写生に熱心に取り組んだと伝えられています。本作品は、落款や画風から推定し、謹慎が明けた直後の1812(文化9)年頃の作品であると考えられます。謹慎中を共にした昆虫への愛情がうかがえる丁寧な描写が見どころの作品です。



増山雪齋《草花蜻蛉図》制作年不詳  
絹本着色 各111.6×37.8cm 個人蔵

### 利用のご案内

開館時間 |  
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 |  
月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌火曜日[9月17日、9月24日、10月15日、11月5日]閉館)

◎2024年12月2日(月)～2025年3月下旬まで、施設改修工事のため休館します。再開館の予定につきましては、当館ウェブサイトにて告知します。

### 観覧料 |

- 常設展示  
[美術館のコレクション+柳原義達の芸術/特集展示]  
一般 310(240)円  
学生[大学・各種専門学校等] 210(160)円  
高校生以下無料 ※( )内は20名以上の団体料金

○企画展示/その都度定めます。  
※学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。  
※障害者手帳等(アプリ含む)をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。  
※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は、各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。

### メールマガジン |

三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。  
詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

### 美術館公式 X(旧Twitter) |

三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。Follow us on X @mie\_kenbi

### 三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費 |  
一般会員:3,000円 ヘア会員:5,000円  
グループ会員(4名):8,000円

◎特典  
会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、ミュージアムショップご利用割引等。  
詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

### 公益財団法人 三重県立美術館

#### 協力会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費 | 年間一口  
法人:50,000円 個人:25,000円  
準会員:10,000円

◎特典  
展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

### 三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11  
TEL.059-227-2100(代表)  
FAX.059-223-0570

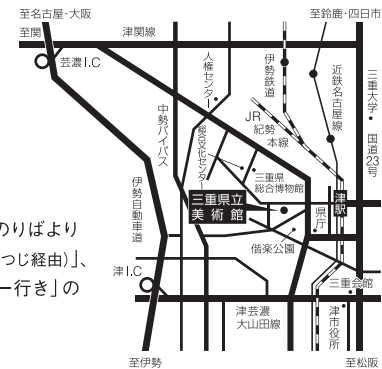
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/



### 交通 |

津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分

※できる限り公共交通機関をご利用ください



三重県立美術館ニュース

# HILL WIND 55

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS



石真定画

三重県立美術館ニュース  
「HILL WIND 55」

発行日 | 2024年9月5日(第・無断転載)  
企画・編集・発行 | 三重県立美術館 チヤーン | 瀬田尚子 印刷 | 株式会社チヤーン

## 石原秀雄《暗室の王》にみる 光と影

当館の正門から正面階段にむかうまでの左手石畳の上に、石原秀雄（1951-）が制作した《暗室の王》（図1）が設置されています。作品の前面には4段の階段があり、その先には20cm角ほどの入口が2つみえます。内部をのぞくと緩やかな傾斜がみえ、部屋の奥へと続く階段があります。天井には約5cmの斜めに貫通した孔<sup>あな</sup>が3か所あり、暗室に光が差し込むよう設計されています。

この作品の題名である「暗室の王」は、インドの詩人タゴールによる戯曲に由来し、暗室に閉じこもる王様のお話です。石原は自身の幼少期の思い出や当時の息子の姿に重なるものがあったといいます。王様のように自ら扉を開けて外へ足を踏み出してほしいと願い、「暗室の王」を主題とした作品を制作しました<sup>1</sup>。

本作を手掛けた石原は、愛知県出身で東海地



図1 《暗室の王》1994年 三重県立美術館蔵

方を中心に活動を展開する彫刻家です。大学在学中に第3回中日展に出品した《波紋》（図2）が大賞を受賞したことを契機に、国内外の野外彫刻展へ参加しました。制作当初より、東南アジアの古代遺跡への関心を持ち、旅行で訪れた古代遺跡から着想を得た作品を多く創り出しています。

1982年に制作した《波紋》は、箱形状の大理石の内側に半球状の閃緑岩<sup>せんりょくがん</sup>を沈めた構造で、そのくぼみに水を張ると、光の屈折により、球体が浮き上がったように見える作品です。90年代から手掛けた「アジア」シリーズのひとつである《アジア'92-III水圏》（図3）では、穴から流れる5本の川筋が側面に刻まれ、東南アジアの遺跡で見た風景が表現されています。その後、「暗室の王」シリーズを経て、多面体の作品を手掛けます（図4）。制作した多面体の素材は竹や石材が用いられ、五芒星<sup>ごぼうせい</sup>（正五角形）をモチーフとしました。石材の多面体は、立方体の石を切り出しながら同じ形の面を作るため、完成するまでに試行錯誤を重ねて制作したことが窺えます。

作品の変遷を辿ると、初期の作品は《波紋》のくぼみにみられるような解放感のある空間であったのに対し、徐々に四角い空間

橋本三奈

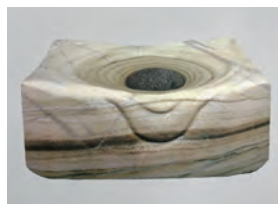


図2 《波紋》1982年  
大府市農村環境改善センター  
（吉田公民館）蔵



図3 《アジア'92-III水圏》1992年  
美濃加茂市（太田連絡所）蔵

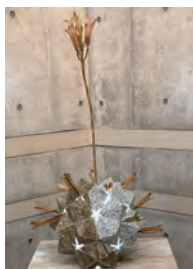


図4  
《山百合と五芒星》  
2021年 作家蔵

を側面に刻み、《暗室の王》以降は、作品の内部に空間が作られました。多面体の作品では、正五角形にくり抜いた孔から空間に灯る光が放たれる構造となっています。《暗室の王》では光が外から内へ差していましたが、多面体の作品では、内から外へ光が出るように変化していきました。

当館所蔵の《暗室の王》は、1994年の第14回神戸須磨離宮公園現代彫刻展で三重県立美術館賞と東京国立近代美術館賞の2賞を受賞し、同年12月に当館に設置されました。緯度と経度を計算し設置することで、天井から暗室に差し込む光が月の形で現れる仕掛けを作品に取り込みました。三日月形から満月、満ちかけた月へと移ろう光は、息子の誕生月の夏に約10数分間見られるように設計されました。2003年の当館の増改築事業により、当初の設置場所より5mほど北側に移動することになり、位置を調整しながら現在の場所に再設置されました。新しい場所に移動した本作について石原は、太陽の光を一日中浴びることができなくなったが、

背面にあるクスノキの揺れた影が作品に映ることで暗室の王に新たな意味を吹き込んでくれたように思うと語っています。

本調査に着手するきっかけとなったのは、石原氏から本作の処置について相談を受けたことに遡ります。白御影石の表面に経年の汚損がみられたため、作品を洗浄する提案を受けました。作品保全の観点から、まずは使用された素材や制作の背景など、石原氏にお話を伺うことにしました。

本作品の処置については、当館のボランティアスタッフと定期的に清掃していることもあり<sup>2</sup>、表面の汚れも落ちて周りの風景に馴染んできていると言う石原氏。本作は、「暗室の王」シリーズの第1作目となった作品で、これまで手掛けた彫刻の中でも最も思い入れのある作品であると語っています。

所蔵館として、作品を守り伝えていくことは大切な使命です。今後も継続して作品保全に取り組んでいきたいと考えています。

謝辞 | 本稿執筆にあたり、石原秀雄氏に多大なるご協力を賜りました。深く感謝申し上げます。

註1 | 作品のタイトルはすべて《暗室の王》。制作した全7点中現存する6点は、出品歴（制作年）を以下に記した。  
1. 図1と同じ。出品歴は本文中に記載あり / 2. 西播磨石影シンポジウム'95（1995） / 3. '96日向現代彫刻展（1996） / 4. 朝来1997年野外彫刻展（1997） / 5. 第5回「風の芸術展」ビエンナーレ「まくらざき」（1997） / 6. おかやま彫刻アートジャンボリー'98（1998）  
註2 | 藤田馨「屋外彫刻の清掃」『Hill Wind（三重県立美術館ニュース）』52号、2023年

## 続々発見！ 木下富雄の水彩画

坂本龍太

木下富雄（1923-2014）は四日市市出身の版画家。突き彫りによるギザギザの線が特徴的で、人の顔を主な主題として手がけました。1950-60年代には国内外の版画展で受賞を重ねます。三重県立美術館では、2023年に木下富雄の生誕100周年を記念して「特集展示 生誕100周年 木下富雄展」を開催しました。同展では初期から晩年に至る約60点の作品を展示し、現在、忘れられつつある戦後の重要な版画家木下富雄の芸術を紹介しました。出品作の中にはこれまで知られていなかった水彩画も含まれました。晩年に制作されたと見られるこれらの水彩画（一部に油彩）は、版画家木下富雄の知られざる一面といえます。

展覧会では4点の水彩画作品を展示しましたが、実は展覧会を準備する中で他にも新たな水彩画（一部に油彩）が見つかりました。それが今回ご紹介する7点の作品です（図1-7）。これらの作品は2点の出品作品（「特集展示 生誕100周年 木下富雄展」図録番号59、62）の額の内側に納められていました。

図録に掲載する作品画像を撮影するため、額を開けてみたところ、額の裏板と作品の

間から見つかったのです。木下は作品を丸めずに保管するため、額の内側に重ねて入れて保管していたようです。

発見されたのは、枝（図1）、植木鉢（図2）、竹林（図3）、野菜（図4）、そして公園や田園、野山とみられる景色（図5-7）が描かれた作品の7点。ご遺族の話によれば木下はしばしば写生に行っていたとのこと。風景が描かれた3点は木下が現地に赴いて描いた作品なのかもしれません。清澄な色彩で水面や空が描写されています。そして、7点の中でもひととき目を引くのが竹林を描いた作品。大胆にクローズアップして描かれた一本一本の竹は力強く、非常にインパクトのある作品となっています。画面には署名と印も付されており、木下にとっても満足のいく仕上がりだったのでしょうか。

興味深いことに今回発見された作品には、木下の版画作品のメインテーマである人間の顔が描かれた作品は一点もありませんでした。これらの作品は、版画家木下富雄の多彩な側面をうかがわせませ



図1



図2



図3



図4



図5



図6



図7

※作品は全て個人蔵